

ラーニング・コモンズのあるべき姿の検討

The study of Learning Commons at Shizuoka University of Art and Culture

宮田 圭介

デザイン学部 デザイン学科

MIYATA Keisuke

Department of Design, Faculty of Design

亀井 暁子

デザイン学部 デザイン学科

KAMEI Akiko

Department of Design, Faculty of Design

林 左和子

文化政策学部 文化政策学科

HAYASHI Sawako

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

羽田 隆志

デザイン学部 デザイン学科

HADA Takashi

Department of Design, Faculty of Design

野村 卓志

デザイン学部 デザイン学科

NOMURA Takashi

Department of Design, Faculty of Design

的場 ひろし

デザイン学部 デザイン学科

MATODA Hiroshi

Department of Design, Faculty of Design

井出 直樹

事務局 情報室 図書係

IDE Naoki

Librarian, Information Systems Section

多くの大学でラーニング・コモンズが運営されているが、学内事情に合わせた工夫が求められる。静岡文化芸術大学にふさわしいラーニング・コモンズ実現のために、あるべき姿を検討して実用性のある提案と試行を行った。両学部教員にゼミを含む教育活動を図書館・情報センターで行っていただき、ラーニング・コモンズへの要望を挙げていただいた。その意見をもとに、容易に組み立てができ、設置場所に合わせて柔軟にサイズ変更ができるシステムを試作した。そのシステムを図書館・情報センターに設置して、1年間の運用実験を行ったので、その状況を報告する。

Learning Commons are operated at many universities, but some ingenuity is required according to the circumstances of each university. In order to realize Learning Commons suitable for Shizuoka University of Art and Culture, we have examined the ideal form and made practical proposals and trials. Both faculty members have carried out educational activities, including seminars, in the library / information center, and have asked our students to raise requests for Learning Commons. Based on that opinion, we have made a prototype system that can be easily assembled and flexibly resized according to its installation location. The system was installed in a library / information center, and one-year operation experiment was conducted.

1. はじめに

静岡文化芸術大学は2学部（文化政策学部、デザイン学部）、2研究科（文化政策研究科、デザイン研究科）で構成される学生数約1450名、専任教員数90名弱の大学である。学内の情報環境整備のために、2016年5月～2017年2月にかけて、教職員によるワーキンググループを構成し、以下の検討を行った。

- (1) 入学時から卒業後まで連続した学生の追跡調査が行える情報システムの整備
 - (2) アクティブラーニングやeラーニングを促進するための広域Wi-Fi環境の整備
 - (3) 広範なポータル化、ペーパーレス化等の合理化推進
- これらの環境整備に伴い、本学でのラーニング・コモンズのあり方が課題に挙がってきた。ラーニング・コモンズとは、学生の学習支援を目的として、図書館を中心に設けられた場所や施設である。通信環境が整備され、グループ学習のための家具や機器が用意され、アドバイザーがいる

学習空間を本稿では想定している。そして、情報環境整備とラーニング・コモンズの整備にはかなりの予算がかかるため、同時に検討する必要がある。そこで、両学部教員と図書館職員と共同で、本学にふさわしいラーニング・コモンズの検討を行うことになった。有効性のあるラーニング・コモンズ実現のために、本学においてあるべき姿を考え、現存するインフラを生かした提案を行うことを目標にした。本稿では、その活動内容について紹介する。

2. 動向調査

多くの大学において、さまざまなラーニング・コモンズが設置、運用されている。ラーニング・コモンズの運用調査や報告^{[1][2][3]}を見た限りでは、図書館内に設置された施設、図書館に隣接する施設、図書館と切り離れた施設、学内全域が施設など、多種多様な形態がある。その要因として、各大学のラーニング・コモンズに対する考え方の違いや、大学構内における図書館の位置、図書館内の設置ス

ペース、予算上の制約などが考えられる。



図1. 本学の図書館の様子

- ラーニング・コモンズが目指す方向としては、
- (1) 参加人数を問わずグループ学習が行える環境
 - (2) 必要に応じて簡単に文献調査、インターネット検索が行える環境
 - (3) グループで議論しやすい環境
- などが挙げられる。

本学の図書館（図1）にもラーニング・コモンズを想定したグループ学習室がある。また、文献調査やインターネット検索を行うためのメディアステーション（図2）は、2000年の開学時から設置されている。ただ、それらの部屋が離れているため、相乗効果が上げにくい状況にある。

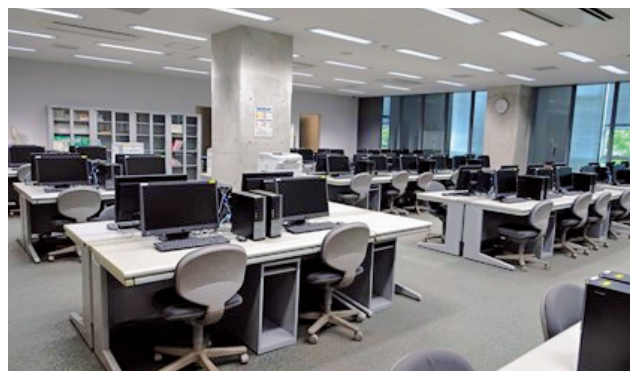


図2. メディアステーションの様子

ラーニング・コモンズは、働きやすく創造性が発揮しやすいオフィス環境と目的が似ていることから、オフィス家具のショールーム調査（図3）と営業担当者へのヒアリングも行った。用途に合わせて、机や椅子のレイアウトを自由自在に変えることができるよう、軽量であり、柔軟性、可搬性に富む仕様であることが観察された。楽しく仕事ができそうな雰囲気やコミュニケーションが図りやすい工夫が成されている。美術・芸術系大学の演習室ではよく見られる、いわゆる「クリエイティブ」な学習環境を構成する家具をオフィス向けに活用したとも言える。

ただし、柔軟性のある家具を導入しただけで学習しやすい環境が作れるわけではない。館内のインテリアを含め、全てデザインしなければ実現は難しいと思われる。理想と

しては、学習内容に応じて、環境自体に柔軟性があり、可搬性に富むことが望ましいと思われる。例えば、オフィス内にテントを持ち込んで、その中で作業することも挙げられる^{[4][5]}。また、設備導入の思惑通りに学生が利用することは期待できない。学生の利用状況を調べて検証を繰り返しながら、ラーニング・コモンズを修正する継続的な活動が必要となる。従って、今回の検討では、現在の図書館においてラーニング・コモンズとして使いやすい空間を見つけて、そこに機材を設置して運用と検証を行うようにした。



図3. オフィス家具ショールームの展示例

3. ラーニング・コモンズ設置場所の検討

3.1 グループ学習室における検討

本学の図書館にはラーニング・コモンズを想定したグループ学習室が設置されているが、利用者が多いとは言えない。そこで、使われない要因分析も含めて、グループ学習室で筆者宮田ゼミの演習（図4）を行った。研究室から実体投影機やプロジェクターを持ち込み、通常のゼミ演習

と同様、飲食自由の状況で演習を行った。図書館内の飲食は禁止されているので、例外措置である。正六角形のテーブルは学習室専用に作られたもので、6分割できる重厚な家具である。重量があるために移動させにくく、学生たちはテーブルに合わせて座り、議論を行っていた。学生たちの反応としては、研究室で行うゼミと違和感がないようであった。ゼミ演習の気分転換には有効である。ただ、テーブルが重いために、グループ分けして議論することが面倒である。また、図書館の一番奥の目立たない場所にあるため、学生に存在を知られていないことが課題であることが分かった。



図4. グループ学習室でのゼミ実験

3.2 集密書架コーナーにおける検討

図書館内においてグループ活動しやすい空間として、集密書架が挙げられた。貴重な収蔵図書の保管のために温度・湿度管理が成されており、密閉されているため、騒いでも声が図書館内に響かない長所がある。研究室から実体投影機やプロジェクターを持ち込み、筆者宮田ゼミの3年生向け演習と4年生向け演習(図5)を行った。通常のゼミ演習と同様、ここでも飲食自由とした。

主な学生の意見としては、

- ・5名程度のグループであれば、机が広くて使いやすい
- ・にぎやかでも周囲に迷惑をかけないので安心である
- ・学内で一番空調がいいので快適である
- ・デザイン関係の図書を取りに行くのが遠くて面倒である
- ・飲み物が持ち込めるとありがたい

など、比較的好意的な反応であった。ラーニング・コモンズと集密書架の併用の是非は別として、設置場所としてふさわしい印象を受けた。



図5. 集密書架コーナーでのゼミ実験

3.3 図書館への要望聴取

筆者林ゼミの学生が、卒業プロジェクトの一貫として「静岡文化芸術大学の図書館の未来を考えるワークショップ」を開催した。この報告中、関係すると思われる箇所を紹介し、本学図書館の課題と提案を行う。

参加学生の声

- ・複数で座れる机があるわりに館内の私語が禁止なため、机を複数で利用できる意味を見出せない。複数で話し合いながら利用できるように決まりを変えるか、仕切りを作ることが必要と感じた。
 - ・個人用机が少ない。複数人用の机を1人で使うことに抵抗がある。
 - ・1人が座っていると残りの席でグループワークはしにくい
 - ・自習している学生にとって話し声は気になる。静かに利用したい学生と話し合いながら利用したい学生双方にとって望ましい区分けなどの対策をする必要があると感じた。例えば2階では私語可、1階では不可など。
 - ・グループ学習室を学生同士でどのくらい利用しているかは不明。使えることをもっと宣伝したほうがよい。
 - ・長時間使うときの飲食が困る
- などであった。

学生の声にあるように、一人で静かに利用する席と話し合いを行なう席のあることが好ましい。実際、このようにスペースを分け入る大学図書館は多い。ただ、各学生が取り組む分野は異なっており、どの学生もそれぞれ自分の取り組む分野の図書が近い位置に閲覧スペースがあることを求めると考えられる。このため、2階と1階それぞれにスペースを設けることを考えたい。

現在、北棟2階では書棚をはさんで一人に一人用、もう一方にグループ用閲覧机が配置されている。西棟2階も同じように片側に一人用、もう一方をグループ用としてはどうか。その上でグループ用閲覧机と椅子の見直しを提案したい。現在のグループ用閲覧机は大きなもので39cm × 79cmある。複数の学生がノートや図書を広げて学習することを考えて十分な広さがとられている。しかしこの広い机を囲んでグループワークを行うとどうしても声が大きくなってしまふ。またこの机は両サイドにそれぞれ椅子3脚がぴったり入る形となっている。その結果、6人以上のグループは使いにくい。グループワーク用には、人数に合わせて使えるフレキシブルなものが望ましい。小さくまとめることができれば、声を抑えた話し合いが可能であろう。現在使われている大きな机は間に仕切りを置いて個人用とすることにより、「個人用机が少ない」という学生の声に対応できる。

北棟1階の場合は、グループ学習室の開放で対応できる。

学生の指摘にもあるように、グループ学習室の宣伝が必要である。さらに、間仕切りを置くなどして、複数のグループが同時にこの部屋を使えるようにしてはどうか。ただそのためには、この部屋に置かれている机と椅子を運びだしさらに床の整備も必要となってくる。

ここまでみてきたように、机、椅子などの備品を見直し配置を工夫することで、学生の要望にある程度対応するこ

とは可能と考える。さらには、グループごとに規模の融通性をもって利用可能なスペースを簡便に用意することが出来れば、より要望に対応し易くなるものとする。

4. ラーニング・コモنزの試作

4.1 空間を生成するシステムの検討

ラーニング・コモنزの空間を生成するシステムが満たすべき要件は、柔軟な利用が可能な創造的思考のための場を生み出し得ること、そして可搬性に優れていることであった。その実現のためには、空間の大きさや付加される機能が設置場所に応じて調整可能（図6、図7）であり、工具等を使用せず容易に組み立てが出来、分解すればコンパクトになることが必要であった。



図6. システム組み立ての様子

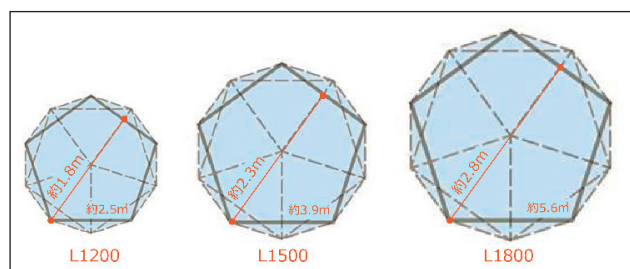


図7. 空間ボリュームを選択できるシステム



図8. システム接合部の工夫

架構・素材・組み立て方法・費用などの多岐にわたる観点からの検討の結果、内径38mm、肉厚3mmの紙パイプをジョイント（図8）によって繋ぎ合わせ、正五角形の平面形状から立ちあがる、正五角錐反柱形状（正二十面体の底部の正五角錐を切り取った形）の覆いを作成することによって場を生成する案に至った。多面体の空間を線材の集合によって生成する考えは、1950年代にバックミンスター・フラーによって提示されて以降、それに示唆を得た多くの

試みが既になされているが、今回計画は構成素材やジョイントの工夫によって生成する空間ボリュームや付加性能を可変出来る柔軟性と、工具を使用しない短時間での組み立ての容易さの実現に特徴がある。紙パイプ線材の長さによって空間の容積を変化させることが出来、必要性能に応じた面材の選定によって空間性能も調整可能である。今回独自に考案・制作した接合部には、構造を支えるテンション材や性能をつかさどる面材の取り付けが出来ることに加えて、照明等各種付加物の取り付けが可能な仕組みが組み込まれる。また工具の不要な乾式のシステムであることから、簡単にどこにでも短時間で出現させることが可能である。こうして設置場所や必要な機能に応じて空間を自由に生成することの出来る、柔軟性に優れ可搬性のある創造的思考の場が実現可能となった。

4.2 図書館におけるシステムの適用

図書館における運用実験のための、システムの適用方法について検討を行った。まず図面（図9）における設置場所の可能性の検討を行った。図書館全体の動線との整合、防災上の条件、既存什器の移動可否といった各種要件を考慮すると設置可能な場所の候補は数か所に限定された。

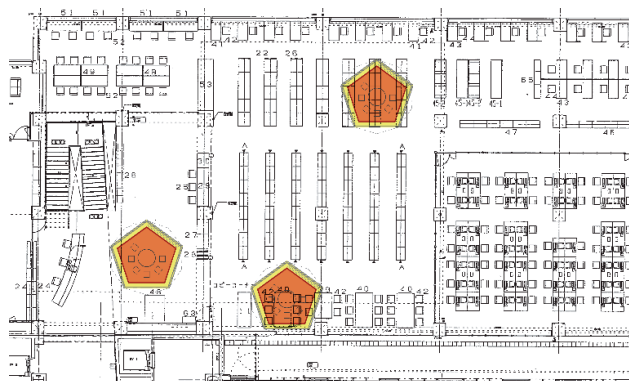


図9. 図書館内の設置場所の検討

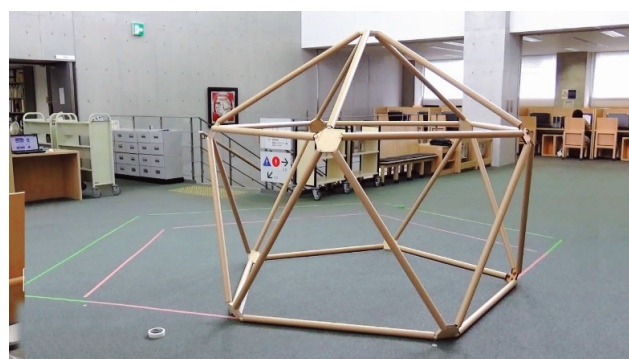


図10. 設置するシステムサイズの検討

次に、図書館における実施寸法の検証を行うため、モックアップ作成および現地でのスケール確認（図10、図11）を行った。小寸法を採用すれば設置場所の選択肢は増えるが、少人数用の小空間となる。一方、収容可能人数を増やそうと大寸法を採用すれば、設置場所が限定される。図書館内の諸条件と整合がとれつつ空間内部の利用想定を

満たす寸法の決定が必要であった。その結果、一辺長さ1.8m、直径約2.8mのボリュームが図書館内での運用実験に当たり採用されることとなった。



図11. 組み立ての実践と利用寸法の確認

空間を覆う面は光や気配を通すプラスチック製ダンボールの設置位置を選択しながら配置することによって、内部の落ち着きと図書館による適切な管理を両立させた。この面材の配置はまた図書館のベース照明を既存のまま利用することが可能であり、空調の流れを妨げず内部の温熱環境も図書館と同様の快適さを保つことが可能である。床面にはシートを敷き（後日カーペットに変更）、ローテーブルおよびクッション等を配置し靴を脱ぎ床に座って利用できる場所とした。大学内の他の場所では取ることが出来ない姿勢となりうる環境とすることによって、新たなアイデアの出現が期待できる、創造的思考の場を目指した。

4.3 図書館での運用と評価

図書館の一角にシステムを設置（図12）して、2018年10月から運用実験（図13、図14）を開始した。当初は3か月程度の運用を予定していたが、予想以上に利用者が多かったため、1年間運用することにした。

システムの入口にアンケート用紙を置いて、利用者に任意で記入してもらうことにした。2018年10月から2019年7月の間に44名から回答をいただいた。自発的にアンケート用紙に記入する学生は、このシステムを肯定的に考える学生が多いと思われるが、参考までに有効回答42名の分析を行った。

・利用者の所属学部：

文化政策学部30名、デザイン学部12名

文化政策学部の学生数はデザイン学部の2倍で、教育上、多くの文献検索が必要とするため、図書館の利用頻度の傾向がこの値に反映されていると思われる。

・利用したグループ人数：

1名：1、2名：10、3名：15、

4名：2、5名：4、6名：10

設置したシステムは最大6名の収容空間である。円形テーブル（直径85cm）も3名くらいが使いやすいので、この結果は妥当である。記述回答を読む限り、6名使用はゼミ演習で利用したケースである。

・利用した資料（複数回答）：

図書館資料10名、持参資料29名、パソコン10名、

携帯電話14名、その他4名

さまざまな資料を持ち込んで学習していたことがわかる。



図12. 館内に設置したシステム



図13. システム運用の様子



図14. システム内部の雰囲気

・図書館の利用頻度：

毎日2名、週2、3回21名、週1回7名、

月2回5名、月1回5名、その他2名

図書館利用者以外の学生でも気づきやすいよう、このシステムは図書館横の通路に面して設置してある。実態としては、図書館を日常使用している学生が、システムを使用したようである。

(1) 利用した感想：

・予想外に快適で使いやすい（15）

・思ったより落ち着いた空間である（7）

・会話が周囲の迷惑にならないか気になる（3）

・大声が出せないなので研究室の方がよい（2）

- ・ずっと設置してほしい
- ・円卓だと人の距離が縮まる
- ・周囲と区切られていて集中できる
- ・クッションが増えていて落ち着ける
- ・新たな空間で作業ができてはかどった
- ・圧迫感がないよう、天井部分が空いているのが良い
- ・人の目を気にせず話し合える

例えるならば、6名入れるテントの中で学習する空間なので、外界と遮断されて、多くの学生はリラックスして利用していることがわかる。ただし、閑静な図書館内にあるため、グループ学習だと声を出すことに抵抗を感じるようである。遮音性ある構造に改良することは難しいので、ある程度にぎやかになっても大丈夫な場所に設置した方が望ましい。

(2) こうだったら使いやすい、というのがあればお書きください：

- ・周囲を気にしなくていいよう、窓を小さくしてほしい。カーテンなどが欲しい (12)
- ・パソコン利用のためのLANケーブルとコンセントが欲しい (7) (対策済)
- ・背もたれ、座椅子が欲しい (5) (対策済)
- ・時計が欲しい (3)
- ・図書館内にいくつもあって目立たなければ使いやすい (2)
- ・入り口にカーテンが欲しい (2)
- ・もう少し大きいテーブルがほしい (2)
- ・冬場はブランケットがあるとよい (2) (対策済)
- ・冬場はこたつが欲しい (2)
- ・ホワイトボードが欲しい
- ・もう少し人目につかない場所に設置してほしい
- ・カーペットがあるといい (対策済)
- ・靴の置き場所を工夫してほしい
- ・いつ使って良いのか分からない
- ・洋式の椅子とテーブルがほしい

外部から覗かれることに抵抗があるようで、システムの開口部を小さくする要望が多い。館内の学生と視線を合わせないよう、開口部の形状変更や再配置が必要だと思われる。その他、細かな意見が出ているが、多くの要望は容易に解決できるものばかりであった。

(3) この空間が、学内のこんな場所にあったらこんな風に使えるのだけれど、という意見があればお教えください：

- ・4階ラウンジ (6)
- ・デザイン学部向け演習室 (3)
- ・2階の出会いの広場 (2)
- ・屋上 (2)
- ・座りながら作業のできる場所
- ・図書館

この質問への回答は少なかった。4階ラウンジは図書館から離れているため、図書館資料の調査はできないが、それ以外の資料を使ってグループ学習することは可能である。また、会話で周囲に迷惑をかけることもないので検討する余地はある。

4.4 他の場所での運用

学内の多くの場所に設置されると、どこでもグループ学習が行えるようになる。そこで、アンケート回答で希望が多かった、4階ラウンジに図書館より一回り小さいサイズのシステムを設置 (図15) して、2019年の新学期開始日から運用実験を行った。休憩を兼ねた利用方法が多いと想定されるので、クッションなどリラックスできる小物を用意した。通路に設置することから、雑巾で拭きやすいマットなど図書館と異なる仕様にした。ただ、清潔感を保つための清掃など、定期的な維持管理作業が煩雑であったため、残念ながら3か月後に撤去した。利用する学生はいたので、清掃方法の課題を解決できれば、再度設置する価値はあると思われる。



図15. 4階ラウンジに設置したシステム

4.5 量産化の工夫

多数のシステムを提供するには、簡便な接合部品を準備する必要がある。そこで3Dプリンタを使用して試作を行った。1つのシステムを組み上げるために必要なジョイントは、5本のパイプ接合用6個と、4本のパイプ接合用5個の11個が必要である。三次元的な接合角度が重要であり、僅かな狂いがあるとシステム全体の歪みの原因となる。そこで、3Dプリンタを利用し量産検討することとした。

4.5.1 設計の要点1

3DCADによって角度の算出と外形形状のデザインを行った。その際に工夫を要したポイントは紙パイプの製造誤差への対応である。紙パイプは内径を基準に製造されているが、0.5%程度 ($\pm 0.2 \sim 0.3 \text{ mm}$) の誤差がある。ジョイントは3Dプリンタ用材質として普及しているABS樹脂を用いることとしたが、ABS樹脂は伸縮性に乏しく、材質の弾力によって誤差を吸収することができない。

内径誤差に応じてジョイント腕部の外径を切削する作業には時間を要する。そこで腕部に4本の凸部 (図16) を設け、紙パイプ内側に接触するのはこの凸部だけとした。凸部を紙パイプ内径の最大値に合わせて設計し、凸部以外は紙パイプ内径の最小値より僅かに小さくした。

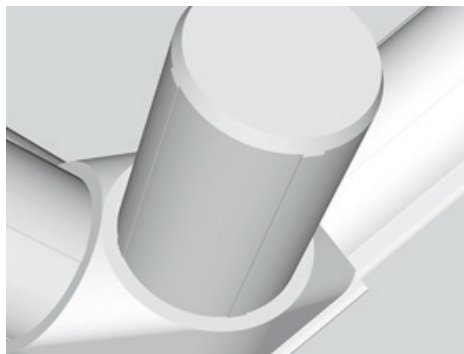


図16. 腕部に設けた帯状の凸部

この工夫により、内径が大きめの紙パイプには凸部がちょうど当たり、押し込むだけでがたつき無く組み立てることができた。また内径が小さめの紙パイプの場合は、多少無理に押し込むことで、紙パイプ内側の、凸部に当たっている部分が膨らみ気味となり、逆にそれ以外の部分は潰れ気味になることによって埋め込むことができた。

ジョイント部分を凸部のみとせず、円柱部分を残したのは、紙パイプが大きく変形して四角形断面になると嵌め合いの強度を失うため、紙パイプの変形を防止する意図がある。

4.5.2 設計の要点2

紙パイプの接合箇所は容易に抜けてしまう可能性がある。そこでジョイント部に溝（図17）を設け、ロープを紙パイプの中を通して一周させて、縛ることによって固定できるようにした。システムの自重があるため上下方向の拘束は不要と考えて、ロープを通すのは中段の5つのジョイント拘束と、下段の5つのジョイントの拘束の2本にした。

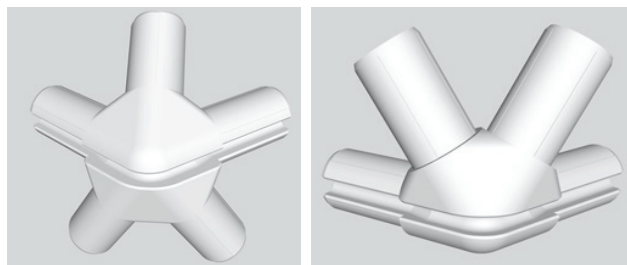


図17. ロープを通して固定させるための溝

4.5.3 設計の要点3

外形形状に関して、幾何学的で機械的な形状より、柔らかい印象を与える形状が好ましいと考え、ジョイント外側の露出部は球面から緩やかに紙パイプに移行する曲面とした。ただし有機的すぎる形状にすると5本パイプであることから軟体動物を連想させる形状となる。これもまた学習スペースには好ましくないと考え、曲面ではあるが有機的にはならない程度を狙い、三次元的な自由曲面の使用を避けた。



図18. 試用中の量産用システム

以上により決定した形状で、ロープ溝付き5本パイプジョイントを5個、ロープ溝付き4本パイプジョイント5個、そして頂上用ロープ溝無し5本パイプジョイント1個の11個を1システム用セットとして試作した。3DプリンタはTiertime社のUP BOXを使用した。1個の試作に約8時間を要した。

ロープ無しでシステムを組み立てて、約4ヶ月間試用（図18）したが、想定以上に結合状態が良く、接合部が弛む気配はなかった。適切なジョイント設計と、学生が丁寧に使用したことが良好な要因として挙げられる。

5. 考察

5.1 ラーニング・コモンズとしての有効性

試行から1年経過して、若干の補修作業が必要になってきたものの、利用する学生が意外にいるため、試用期間を2020年3月まで再延長することになった。紙管とプラスチック段ボール材の強度の低い材料でできたシステムにもかかわらず、1年間試用することができて、耐久性のあることが確認できた。グループ学習の効果は未確認であるが、学習環境としての有用性はあると言える。このシステムは可搬性があるので、用途に応じて複数のシステムを配置することにより、より有効性は高まると予想される。

図書館内のこの場の利用が増え、グループ学習の場としての認識が定着することによって、今回運用したラーニング・コモンズのシステムが、学内における「協働による創造的思考の場」のアイコンとしての役割を担うことが期待できるのではないかと。学内の他の様々な場所にあらわれた同様の場が、各場所においてそれぞれ、創造的な協働の学びを誘発する可能性がある。生活の様々な場面にたちあられる協働する学びは、より身近に生活の中で生き生きと展開する可能性を想起させる。

かつて大学空間の起源は、街頭や橋のたもとなど多くの人の往来がある中に、教師と学生が知的時間を共有する時にたちあられる、都市の中の間であった^[6]。大学内のいたる所に自由に出現する、協働による創造的思考を誘発する仕掛けとしての場と、その原初となる図書館内の場、この連携の効果と発展可能性は今後も継続して追究していくべき課題であると考えられる。

5.2 新たな有効性

今回試行したこのシステムは、可搬性に優れ、組み立てが容易であり設置される場所の状況に合わせて調整を加えながら利用できることから、アイコン的にメッセージを発しながら様々な場面に出現し、日常的な利用の中に溶け込んでいく可能性を含んだものであった。この考え方を地域的展開に発展させ、このシステムを日常生活と災害時の生活の非連続性を軽減し減災に貢献する要素として活用することはできないかと考えた。

災害時の被災者の社会環境ストレスの要因には、避難所での不慣れた生活や日常生活の破たん^[7]が筆頭に挙げられる。今回試行したシステムを例えば、小学校や公民館など地域の諸施設において日常的に使用しておく。そして災害時には体育館等大空間において、プライバシーを確保するためのシェルターとして利用する。日常生活で普段から使用し、その利用に十分慣れたものが災害時のシェルターとして利用できるのであれば、災害時にも良く慣れた体験済みの空間で生活することができる。この考え方について、芸術工学会主催の「減災デザイン&プランニング・コンペティション2019において提案し、最優秀賞として評価頂いた。この展開可能性については、今後も検討を継続していく考えである。

6. まとめ

本研究では、静岡文化芸術大学にふさわしいラーニング・コモンズ実現のために、あるべき姿を検討して実用性のある提案と試行を行った。得られた結果は以下に要約される。

- (1) 本学の図書館・情報センター内でラーニング・コモンズ設置にふさわしい場所の実験検討を行った。
- (2) 学生主体のワークショップを実施して、図書館・情報センターへの要望聴取を行った。
- (3) 組み立てが容易で、設置場所に合わせて柔軟にサイズ変更できるシステムを試作した。
- (4) システムを図書館・情報センターに設置して、1年間の運用実験を行い、アンケート調査を実施した。
- (5) 図書館外でのシステム試行実験を行い、課題を抽出した。

本研究は、平成30年度静岡文化芸術大学特別研究「ラーニング・コモンズのあるべき姿の検討」の研究報告であり、図書館・情報センターの方々、および関係者に謝意を表す。

参考文献

- [1] 川井奏美、野田晶子「米国大学図書館における利用者行動調査とラーニング・コモンズの整備について」、大学図書館研究、Vol.98、51-62、(2013)
- [2] 村尾真由子、松原 悠他7名「筑波大学附属図書館ラーニング・アドバイザーの活動」、大学図書館研究、Vol.101、108-118、(2014)
- [3] 上田直人、長谷川豊祐「わが国の大学図書館におけるラーニング・コモンズの事例研究」、名古屋大学附属図書館研究年報、Vol.7、47-62、(2009)
- [4] 「カーサ・ブルータス」、マガジンハウス、No.218、26-61、(2018)
- [5] 朝日新聞「オフィス+テント=仕事効率アップ？」2019年8月19日付夕刊、9、(2019)

[6] 岸田省吾「大学の空間—その変容に見る持続する原理」、『大学の空間』、東京大学工学部建築計画室・建築学科岸田研究室編、鹿島出版会、8-9、(1997)

[7] ストレス・災害時こころの情報支援センターHP「災害時地域精神保健医療活動のガイドライン—2.災害時における心理的な反応」
https://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/document/medical_personnel05_2.html
 (2019年10月6日参照)